

第32回 支店長のわがまち紹介

茨城県取手市

健康と芸術で市の活力を取り戻す

取手から都心方面を望む (写真提供 取手市)

茨城県内の44の市町村を、それぞれにゆかりのある筑波銀行の支店長がご紹介します。第32回は取手市です。筑波銀行は、市内に4カ所の営業店を設置し、取手市の皆さまと密接な関係を築いています。取手支店長の太田貴之が、取手市長 藤井信吾氏、産業活性化推進室長 森田正和氏にお話を伺いました。

●取手市が一番と考えていること、自慢できることはなんですか

本市中心市街地にある取手駅は、JR常磐快速線、東京メトロ千代田線に直通するJR常磐緩行線、TXに接続する関東鉄道常総線の始発駅で、本市は鉄道の便が大変良い市です。首都圏のベッドタウンとして、昭和40年代頃から住宅開発が始まり、順調に人口が増加してきました。しかし、現在は、TXが開業して11年経過し、本市の勢いや位置づけがTX沿線の市に追い上げられている感があります。

本市に来てもらい、住んでもらえるよう、本市のオリジナリティを打ち出したいと考えています。平成27年3月には、「上野東京ライン」が開業して、



ひなパレード (写真提供: 取手市)

取手～品川駅間がJR常磐線快速で最短49分となりました。藤代駅を通る特別快速列車も品川駅発着となり、都心がさらに近

くなりました。この地の利と、他の市町村にはない特長を複合的に組み合わせて広め、市民が本市に住むことがベストな選択であったと体感できるまちづくりを進めます。

市が率先して取組むことと、民間が取組むことを複合して進めます。民間主導の取組みは、商工会の女性部が中心となって、伊豆の稲取温泉で江戸時

代から行われていたつるしびなの風習にヒントを得た「取手ひなまつり」を2月11日から3月3日まで開催しています。今年は第12回と定着しており、観光客の呼び寄せにも成功し、地酒や奈良漬といった地場産品の売上げも増加しています。本市にはあられ、地酒、奈良漬、ビール、ハム、カップ麺等様々な食品製造業があり、取手産と認識できるように「とりで本舗」というホームページで紹介し、ふるさと納税のお礼の品として市内の企業に協力を得た商品をお届けしています。住宅開発が進んでいる関東鉄道常総線ゆめみ野駅（平成23年3月開業）周辺に、平成27年12月に開店したカスミ取手ゆめみ野店には本市産の商品を集めたコーナーを設置し、市民へも地場産品が浸透するように宣伝しています。今後は、口コミだけではなくメディア等も積極的に利用するシティプロモーションを進めます。

本市の高齢化は進んでおり、高齢化率は他の市町村よりも高い31%です。現在の人口構成は65～74歳が多いため、10年後の平成38年には後期高齢者が21,000人を超える試算もあります。健康面の施策を2年前から展開し、人口11万人の規模にしては健康への対策は厚いと自負しています。高齢者に、社会的にも身体的にもいきいきと活動し、周りの人との人間関係を良好に築きながら良い形で人生を熟成してもらうことが理想です。市内3カ所のゴルフ場の協力で「早朝ゴルフ場ウォーキング」や、産直販売所やスーパー等に体組成計を持参し、来客者の体重以外の身体のいろいろな数値を測定して健康維持に役立てています。

(注1) 平成11年より市民と取手市、東京藝術大学の三者が共同で行っているアートプロジェクト。若いアーティストたちの創作発表活動を支援し、市民のみなさんに広く芸術とふれあう機会を提供することで、取手が文化都市として発展していくことをめざす。(出典:TAP)



藤井市長



森田室長



太田支店長

平成27年10月に「取手ウェルネスプラザ」をオープンしました。市民活動の発表の場、健康づくりの場、子育て支援の場を統合した施設で、若い人から熟年の人まで幅広く利用できます。様々な施策の実現のために、点ではなく面で捉えた施設です。駅前で立地も良く、期待した以上の多くの人々が利用しています。都市型公園「取手ウェルネスパーク」と一体で開発され、防災機能も備えています。子育てと高齢者の老後の豊かな暮らしを守ることに力を入れていくまち・ひと・しごと創生の取組みの一環にもなります。

取手駅周辺は土地が細分化され、高額なテナント料のため入居できる業態に限られ、人の流れは駅を通過するだけでした。このような課題の解決は行政が先行して進めなくてはなりません。取手ウェルネスプラザの開業により、取手駅を目的地とする人々が増えました。この傾向が続き、駅周辺に集まる人の流れができると、今後の商業地区の区画整理も進めやすくなります。

本市は、平成27年で市制施行45周年を迎え、記念事業は「みんなで体験・取手の魅力」をキーワードに、数々のイベントを平成28年3月まで継続して実施します。花を添えてくれたのは、キリンビール取手工場でつくられたオリジナルの味の一番搾り「取手づくり」です。

また、東京藝術大学の取手キャンパスがあることから、取手アートプロジェクト（TAP）^(注1)など市全体で若手芸術家の創作発表支援や、市民が広く芸術にふれあう機会の創出に取り組んでいます。屋外で作品を展示する「ストリートアートステージ」、戸頭団地の巨大ウォールアート、公園の彫刻展示、駅前のオブジェ等、市内の至る所にアートが点在します。また、毎年2点、東京藝大学生の卒業・修了作品展における優秀な作品に市長賞を与えて寄贈してもらい、公共施設に展示しています。

現在取り組んでいるまち・ひと・しごと創生の一環の「取手市創業支援事業『起業家タウン☆取手』」が先行型交付金^(注2)の交付対象に決定し、さらに、特徴的な取組み事例として全国に広く紹介されることとなりました。この取組みは、若者から高齢者まで、誰もが起業しやすい環境を整えることで、地域

における創業を包括的に支援するものです。市がインキュベーション施設を取手駅前に設置し、セミナーや創業支援スクールの開催、相談窓口の設置等、ワンストップの支援を実施します。さらに、市が参加を呼びかけて、金融機関や企業等による起業応援団をつくって起業家をバックアップします。

●今後の展望をお聞かせください

市長を務めて3期目です。1期目は行政改革、2期目は健康のための施策と再開発に取組みました。3期目は市民発の起業・創業活動への支援を重点的に取組みたいと考えています。インキュベーションセンターの運営は民間主体で進めたいと考えています。先行型交付金で運営のための一般社団法人を設立し、センター長は外部から公募しました。本市への移住も条件に加え、都内に住んでいた人の就任が決まり、本市へ移住して来ました。また、起業者を応援してくれる市内の企業を募集し、積極的な取引や料金割引などの特典、協力を用意してもらって、行政や企業、商工会、金融機関などが一丸となって起業・創業活動を支援し、本市全体でウィンウィンの関係を築くことが目標です。本市に多くの仕事を創出し、多くの人に住んでもらうことで競争力を強化し、TX沿線市の勢いをしのぐような活力を取り戻したいと考えています。



取手ウェルネスプラザ(写真提供:取手市)

嬉しいことは、本市の人口の減少傾向に歯止めがかかってきたことです。外国人を除いた転入者数と転出者数の差である人口の社会増減は、平成23年はマイナス693人で転出超過でしたが、平成26年はプラス104人と転入超過となり、平成27年はプラスマイナスゼロとなる見込みです。今後は、常磐線沿線の利用度の低い水田を市街地として供給し、活力を創出する面的支援を検討します。ただし、農地転用ができない第一種農地が多いので、十分に対策を練る必要があります。

●筑波銀行に期待することはありますか

まち・ひと・しごと創生の取組みに協力してもらっています。何よりも、地元の商工業者を支えてもらうことが地元の金融機関として一番大切な役割であると考えています。しなやかでたくましい企業を育成する力添えを今後も続けてもらうことを期待しています。

(文責：筑波総研株式会社 主任研究員 國安 陽子)

(注2) 地域活性化・地域住民生活等緊急支援交付金(地方創生先行型)先駆的事業分。都道府県及び市区町村が実施する、他の地方公共団体の参考となる先駆的事業に対し、国が交付金を交付することにより、地方版総合戦略に関する優良施策の実施を支援するものとして交付対象事業が決定された。(出典：内閣府地方創生推進室)